

パフォーマンス評価や課題研究を導入し 自ら問いをもち考える生徒を育成

幅広い層が集まるなか
「どの生徒も取りこぼさない」

京都府立園部高校は、丹波高地の山あいに位置する「地域の学校」だ。設置学科は普通科と、国際的な視野の育成を目指す京都国際科。普通科は3コースに分かれており、標準的な学習を行うSB（園部ベシック）コースと、発展的な学習も行うSA（園部アドバンス）コース、そして附属中学校からの中高一貫コースがある。

普通科(SB・SA)は定員の8割を南丹市内から募集しており、地域の幅広い層の生徒の受け皿となっている。つい最近まで生徒指導が大変な学校で私語や居眠りが多く授業が成立しないクラスもあったとの話も聞かれる。そんななか、「どの生徒もとりにこぼすことなく学びに向かわせたい、この思いでさまざまな取り組みを行ってきた」と副校長・前野正博先生。この10年間の変革のうち、英語科をはじめとする教科主導の取り組みと、教科の連携による学校ぐるみの取り組みについて紹介する。

学習到達目標を明確にし
ルーブリックを使って評価

英語科の転機となったのは、2006年にスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール(SELHI)の指定を受けたことだった。同校がSELHIでターゲットとしたのは、英語に対し強い苦手意識をもち、授業に見向きもし

ない生徒たちだ。特製プリントを作成して英文構造の学び直しを図る一方で、「逆向き設計」論を参考に到達目標の明確化に注力。どの段階で何ができることを目指すか、教員が議論を重ね、2年かけて長期的ルーブリック「英語6年間 Assessment Grid」として整備した(図1)。到達目標の明確化は、「英語でホットケーキを焼く」などの柔軟な授業実践を可能にし、生徒の小さな成功体験の積み上げにつながったという。

さらに、英語力を多面的に評価するために、それまでの筆記・実技テストに加えて、パフォーマンス評価を導入。現在、「英語で自己紹介」「名演説を群読」など、生徒が自ら考え判断して英語を使うパフォーマンス課題を年2〜4回(学年・コースによって異なる)実施し、ルーブリックによる評価を行っている。「BBCの英文記事を日本語の記事にする」といった難易度の高い課題は、SBコースではグループで取り組むことで乗り越えさせ、それぞれが達成感をもてるようにしている。

「学ぶ意欲を引き出す授業によって、勉強が苦手で入学してきた生徒ほど成長していると感じます。3年間で、自分の考えや調べたことについて英語で発表することもスムーズになっています(英語科・光木 宏先生)」。こうした英語科の取り組みは他の教科にも刺激を与え、パフォーマンス評価の実施も広がった(図2)。理科では04年度から「理科課題研究」を実施し

ているが、英語科の評価方法を参考に実施後の振り返りを強化。また、ICTを活用した授業や、講義動画を制作して反転授業を始めるなど、独自の授業改善も行っている。

研修旅行を軸に教科横断型
課題研究プログラムを構築

「どの生徒も、学びたいから学校に来ています。生徒が自分で考えて「わかった」という経験をたくさんさせたい。そのために、教員も一緒に楽しむ姿勢で、いかに生徒を活動的にするかを大切にしています(理科・遠山晶子先生)」

各教科が切磋琢磨するムードは、学校全体の取り組みにも発展した。13年度から実施された「府立高校特色化事業」において、同校はテーマを「探究・協同・表現」に設定。その具体策として立

図1 園部高校英語6年間 Assessment Grid (ダウンロード可)

習熟段階	1	2	3	4	5	6	
理解 (Reading・Listening)	教科書本文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。
表現 (Writing・Oral Communication)	教科書本文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。
知識	教科書本文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。	教科書本文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。簡単な英文の読み取りが正確である。

図2 パフォーマンス課題の例

英語 (全コース1年生)	あなたが尊敬する人(紹介したい人)を探してください。そして一人に絞り込み、その人をクラスメイトに紹介してください。その際、その人がどんなことをしたのか。なぜあなたがその人を尊敬しているのか(なぜあなたがその人を紹介したのか)を、聴く人にわかるように話してください。
国語表現 (京都国際科3年生)	京都国際科のみなさんはさまざまな地域から通学していますね。自分の暮らす市や町について紹介したい「もの・こと・ところ」をクラスメイトに紹介してください。その際、紹介したい事柄については、必要な資料等を調べ、正確な情報に基づいて説明し、紹介したいと思った理由も伝えてください。発表原稿は400字程度で作成し、発表は1分間。黒板を使ってよいことにします。
世界史B (普通科・京都国際科2年生)	「現在」あるものには必ず「過去」があり、この2つの間に「歴史」があります。みなさんが興味をもっている人・物・場所など、対象は問わずにその「歴史」を調べ、自分が抱いている興味がクラスメイトによく伝わるように工夫して、B4用紙1枚にまとめてください。夏休みの課題です。

理解(Reading・Listening)、表現(Writing・Oral Communication)、知識について、それぞれ習熟段階1〜6を文章で表現。コースごとに各学年でどの習熟段階を目指すかについても共有。改訂を重ね、現在も同校英語教育の指針となっている。

取材・文 / 藤崎雅子

学校データ 1887年設立 / 普通科・京都国際科 / 生徒数471人(うち男子195名・うち女子276名) / 進路状況(2017年3月卒業者)大学110人・短大8人・専門学校40人・就職18人・その他6人



園部城跡に建つ同校は、かつての城門が校門として使用されている。



国語科
榎屋房子先生



英語科
光木 宏先生



進路支援部長
米本朋生先生



指導教諭
遠山晶子先生



副校長
前野正博先生

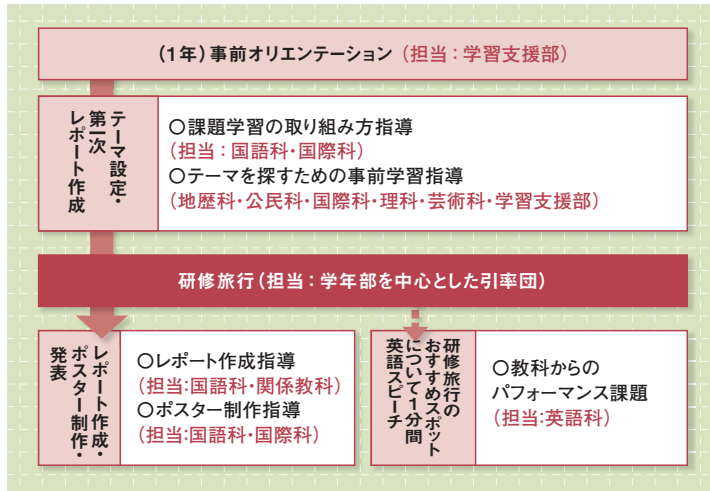


京都大学大学院教育学研究科・西岡加名恵准教授と同校教員24人の共同執筆により、同校の取り組みをまとめた「パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる」(学事出版)を出版。

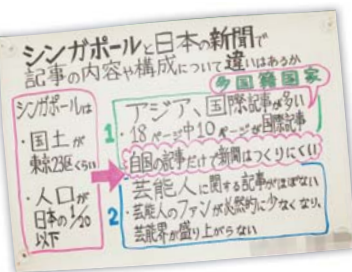
「課題研究」の狙いは、生徒が「自ら問いをもち考える」ことだ。単なる「調べ学習」ではなく「研究」レベルの取り組みとするためには、いかに生徒自身のかから解明したいことを引き出してテーマ設定できるかがカギとなる。事前学習では、「総学」や国語の授業でレポートや論文作成のノウハウを教えるとともに、地歴科や理科、芸術科などさまざまな教科の授業で研修先に関連

ち上げたのが、教科横断による「課題研究」のプログラムだ。
同校では2学年でシンガポール・マレーシアあるいは北海道を訪問する研修旅行を実施している(研修先はコース別/17年度は北海道から台湾へ変更)。これを単発のイベントではなく、事前事後指導を含めた約1年間の探究的な「課題研究」の核として再構成。事前に各自が設定したテーマを研修旅行で調査・検証し、論文やポスターにまとめて発表するという流れをつくった(図3)。

図3 2学年「課題研究」指導の流れ(2015~16年度)



研修先のマレーシアで農園を視察。



課題研究の成果をまとめたポスター。

した特別講義やグループ学習を実施し、テーマ設定のヒントを提供。漠然と「○」についてではなく、「シンガポールの罰金制度に効果はみられるのか?」「日本とシンガポールの緑化政策に違いはあるのか?」のような疑問形でテーマ設定できるよう指導している。
論文やポスターからは、生徒が自ら調べたことを基に論理的に考える力や、考えたことを表現する力を育てていることがうかがえるという。また、進路への影響も出ており、今春、京都大学の「特色入試」に合格した卒業生は、合格の理由に課題研究に取り組んだ経験をあげた。

「当初、課題研究は大学入試対策の妨げになるのではないかとという不安もありました。しかし、自分で考えよう、やってみようという生徒の根本的な意識の変化を感じ、今は生徒の将来のために必要な取り組みだととらえています」(国語科・榎屋房子先生)

十数年前と比べ、「まったく違う学校になった」と前野副校長。現在も学力が多様な生徒が入学してくるが、どのコースの生徒も落ち着いて授業に取り組んでいる。

「わからない」に対して諦めなくなった

「壁にぶち当たっても、すぐ諦めることなく、周りと相談したりしてポジティブに動くようになりました。できるようになるという意欲を感じます」(進路支援部長・米本朋生先生)

卒業生からは、進学先でグループワークなどを行う際、周囲の受身な態度に驚くという話が聞かれる。それだけ同校卒業生は主体的に動く力がついているということだろう。

「変化の激しい現代社会では、絶対的なノウハウや成功パターンがあるわけはありません。自ら動いてさまざまな状況に対応し、乗り越えてほしいですね」(遠山先生)

生徒の多様な力を伸ばす実践ポイント

- ◎ 教科で目指す到達目標を設定し、そこから逆算して授業を設計
- ◎ 授業にパフォーマンス課題を導入し、ルーブリックにより評価
- ◎ 課題研究プログラムの事前学習としてさまざまな教科が特別授業を行い、生徒自身のなかから取り組みたいテーマを引き出す
- ◎ 課題研究のテーマは疑問形で設定させる